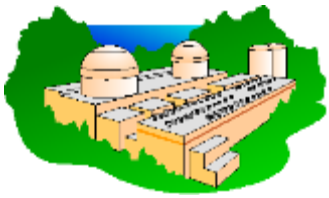
大島堅一　著

『原発のコスト』（岩波新書）

［５４３／０２／１］

夏をひかえて，国と関西は大飯原発の再稼働問題に揺れている。日本の原発やエネルギーの問題は，今が思案のときである。

チェルノブイリ事故が起こった１９８０年代後半，日本でも原発論争が高まった時期があった。ノンフィクション作家・広瀬隆の原発の恐ろしさを指摘した著書が物議をかもし，今はなきロック歌手・忌野清志郎の原子力政策を批判した歌が発売禁止になったのもこの頃だった。そして日本は原発の道を選び，１９９０年代以降は，地球温暖化に対する危機感や原油高騰の中，私達はいつのまにかこの問題を忘れてしまった気がする。



原発の「安全性」や「経済性」不透明なところが多いが，本書では，原発のコスト（経済性）の問題がわかりやすく述べられている。政府の『エネルギー白書』では，原発の発電コスト（建設費・燃料費・運転維持費から算出）は他の発電よりも安い。しかし，実際はそれ以外に，研究開発，立地対策，廃棄物処理などに大きな費用をかかるし，今回のような事故が起こると，電力会社が負担すべき損害賠償，事故収束，廃炉費用の他に，放射能汚染やさまざまな被害に対して莫大な「社会的費用」が必要となる。

この本には，次世代を生きる若者に環境やエネルギーのことをしっかり考えてほしいという思いが込められている。「脱原発は可能だ」というが，本当にそうなのか，節電の夏に考えてみよう。

松本清張　著

『或る「小倉日記」伝』

（新潮文庫）

［９１８／Ｍ１６／１－３５］

数々の推理小説を世に出した松本清張の出世作であるが，これはミステリーではない。

初めてこの小説を読んだ二〇代の頃は，なんて辛い物語だろうと思った。重い障害を持つ主人公・田上耕作は，聡明な努力家だったが，その地道な努力は，結局，報われなかった。

「勝ち組」「負け組」などという人生における成功や失敗のほとんどは，外からの評価によるものだ。一般に世評というものは，本人の心の有様など考慮しない。ゆえに耕作は，世間一般からみれば恵まれない弱者であり，決して成功者ではない。また，たとえ健常で才能に恵まれていようと，人生は一筋縄では行かない。そして，どれほど苦労しても努力を重ねていても，それが実を結ぶかどうかは，その途上にある者にはわからないのである。しかし，これ！と決めたことを着実に積み重ねていくことは楽しい。その結果の如何に関わらず，その過程が楽しいのだ。どのような状況に置かれていようと，目標を持つことで人は豊かに生きることができる。そして，自らが活き活きとした日々を送ることは，身近な人たちを，自分のことを大切に思ってくれるまわりの人たちを，幸せにするだろう。

再読して，耕作の人生は憐れなものでも悲しいものでもなかったと思えた。志した研究を続ける日々は，充実感に満たされていたに違いない。

できれば，皆さんが自分の人生を歩み始める今と，その道の半ばに差し掛かった頃の二度，この作品に触れてほしいと思う。

読書案内

J・D・サリンジャー　著

『ナイン・ストーリーズ』

（新潮文庫）

［９３３／Ｓ１９／１］

日常にちょっとくたびれたとき，翻訳小説をよく読みます。少し古い時代，社会，人物，一風変わった言葉遣い，そうした非日常性がやんわりと疲れを癒してくれる気がするのです。

この本は，『ライ麦畑でつかまえて』の作者，サリンジャーの自選短編集です。小説の舞台は２０世紀のアメリカ，登場人物たちはどこか戦争の影を引きずっています。彼らは一見すると，私たちには縁が薄い人々かもしれません。しかし，彼らが時に不条理で不寛容な現実に対し衝突と挫折を繰り返しながら生きていく有様には親近感を覚えます。言いたいことがあるのに，言葉にならなくてやりきれなさを感じたことはありませんか。自分のことを誤解されて，悔しい思いをしたことはありませんか。その一方で，他人の思いやりや，何気ない事柄や景色に心が救われたことも数知らずあるのではないでしょうか。

この本を読んでいると，誰しもが何かに傷つきながら生きているのだということを改めて考えさせられます。傷ついたときにこうすればいいんだ！と明快な解決策を提示してくれる本ではありません。けれどもきっと，抱える痛みに静かに寄り添って，心を満たしてくれる本です。九つの物語のなかで，私のお気に入りは『小舟のほとりで』です。幼い少年の家出という出来事を通じて母の深い慈しみを，サリンジャーの人間に対する愛情を感じることができます。複数翻訳がでていますが，野崎孝氏の訳がお勧めです。大人へと成長

していく皆さんに是非読んで欲しい本です。

吉田伸夫　著
『宇宙に果てはあるのか』
（新潮社）
［４４３／Ｙ３／１］

現在の宇宙観に達するまでに、科学者たちがどのように試行錯誤を繰り返してきたかについて述べた本です。物理選択でなくても、興味があれば読めます。

科学者が間違いを繰り返す様子や、苦労しながら研究している様子を読むと、普通の人間のように思われます。苦労無しに分かる人間など誰もいない。誤りや修正を重ねながら、少しずつ進展してきた。それでも、今日まで信じていたことが、明日にはくつがえる可能性などいくらでもある。そういう状況なのだと感じさせられます。

同時代の科学者に先駆けて宇宙の始まり（ビッグバン宇宙）について述べたガモフについては、著者は次のように述べます。

「近似のしかたの誤りや単純な計算ミスなど、ガモフの論文には、間違いが山のようにある。にもかかわらず、彼が天才的な先駆者であるという評価は揺るがない。科学に対する全幅の信頼に基づいて、人間の知性がおよばないと思われた領域に大胆に踏みこんでいくチャレンジ精神のすばらしさに比べたら、元素合成の説明が的を射ていなかったことなど、ささやかな誤りでしかない。」

この言葉にしびれました。未知の事柄へ踏み込んでいくとき、信じるべきは人間の感覚や信仰などではなく、客観的なデータや理論に裏付けられた事柄でしょう。全幅の信頼と言えるほどのものではないかもしれませんが、すがれるとしたら、科学しかないということだと思います。

金谷　治　訳注
『論語』（岩波書店）
［０８１／Ｉ１１９／２０２Ｉ１］

「徳不孤」。卒業アルバムの達筆の書。つい先日まで「論語」里仁第四の言葉であることに気付かなかった。岩波文庫で，何度か目は通したはずなのだが。

この四月，岡山在，同期の友人が，六稜会館で「閑谷学校と論語」をテーマに講演し，その際，彼が編者の「論語カルタ」〈図書館にある〉を手に入れた。その一枚が「徳不孤，必有鄰」。そう，《必ず隣り有り》なのだ。恩師方は，世の中に出て行く私たちにこの言葉を贈って下さっていた。自らの教員生活も終えようとしている今に，遠い過去から，恩師方のエールの声が聞こえる。励まし，勇気づける声が。そして，その声は，さらに遙か遠く二千五百年前の魯の国で，一人の師匠が弟子たちを励ました声であり，時の流れを超えて今も響く。

中公新書「論語」湯浅邦弘著，「孔子―漂白の哲人」竹川光太郎著（海竜社），岩波新書「論語入門」井波律子著，祥伝社新書「一気に通読できる完訳『論語』」佐久協著。３月末から６月上旬の間の論語に関する新刊本である。今も魯の先師の言葉が木魂している。弟子一人一人の個性に応じ，厳しいが，ユーモアと機知に溢れる言葉を交わす。傲慢さに激しく憤り，自らの老いに悲嘆する人間味豊かな一人の師の姿がそれらの本から伝わってくる。図書館には，表記以外にも朝日選書版等が収められているが，できれば一冊座右におくことを勧める。

読書案内

梨木香歩　著
『家守綺譚』（新潮社）
［９１３／Ｎ５５／１］
『村田エフェンディ滞土録』
（角川書店）
［９１３／Ｎ５５／３］

梨木香歩さんは、私の好きな作家のひとりです。私が初めて彼女の作品を読んだのは中学生のとき（最初に読んだのは「西の魔女が死んだ」）でしたが、どの作品でも、彼女の書く文章は言葉の選び方がとても丁寧だなと感じます。

今回挙げた２冊は、それぞれ別の物語ですが、２つの作品の主人公がお互いに友人同士であり、双方の話の中にもう一方の主人公の話が登場するため、併せて紹介します。

時代は今から百年ほど昔。前者は物書きを生業とする主人公が、亡くなった友人の家の家守をしつつ、季節の移ろいを綴ったもの。四季折々の草花・風景の描写が風雅で、其処此処に現れる不思議なものたちとの交流も微笑ましい。後者は考古学者として土耳古（トルコ）に派遣された村田が、彼の地で経験する出来事を描いたもの。異国の地で文化や国民性の違いにたじろぎながらも、民族や宗教を異にする友と出会い、互いの持つ多様な価値観を受け入れながら過ごすささやかな日々と、背後に迫る国と国との対立とが対照的です。

著者の言葉は大仰でなく、そのためにかえって胸にストンと届くものがあります。自分の常識や理解の外にあるものを受け入れること、物事の様々な立場を理解すること。当たり前のようでいて実際に行うことは難しい、そういうことを当たり前にできる人でありたいと思わせてくれる作品です。